

臨床現場から見たセマグルチド錠の副作用発現頻度とHbA1c値推移についての分析

○五明 孝太¹ 安田 光² 巽 清³

(1：サン薬局天理本通店 2：サン薬局紀寺店 3：(株)関西メディコ)

目的

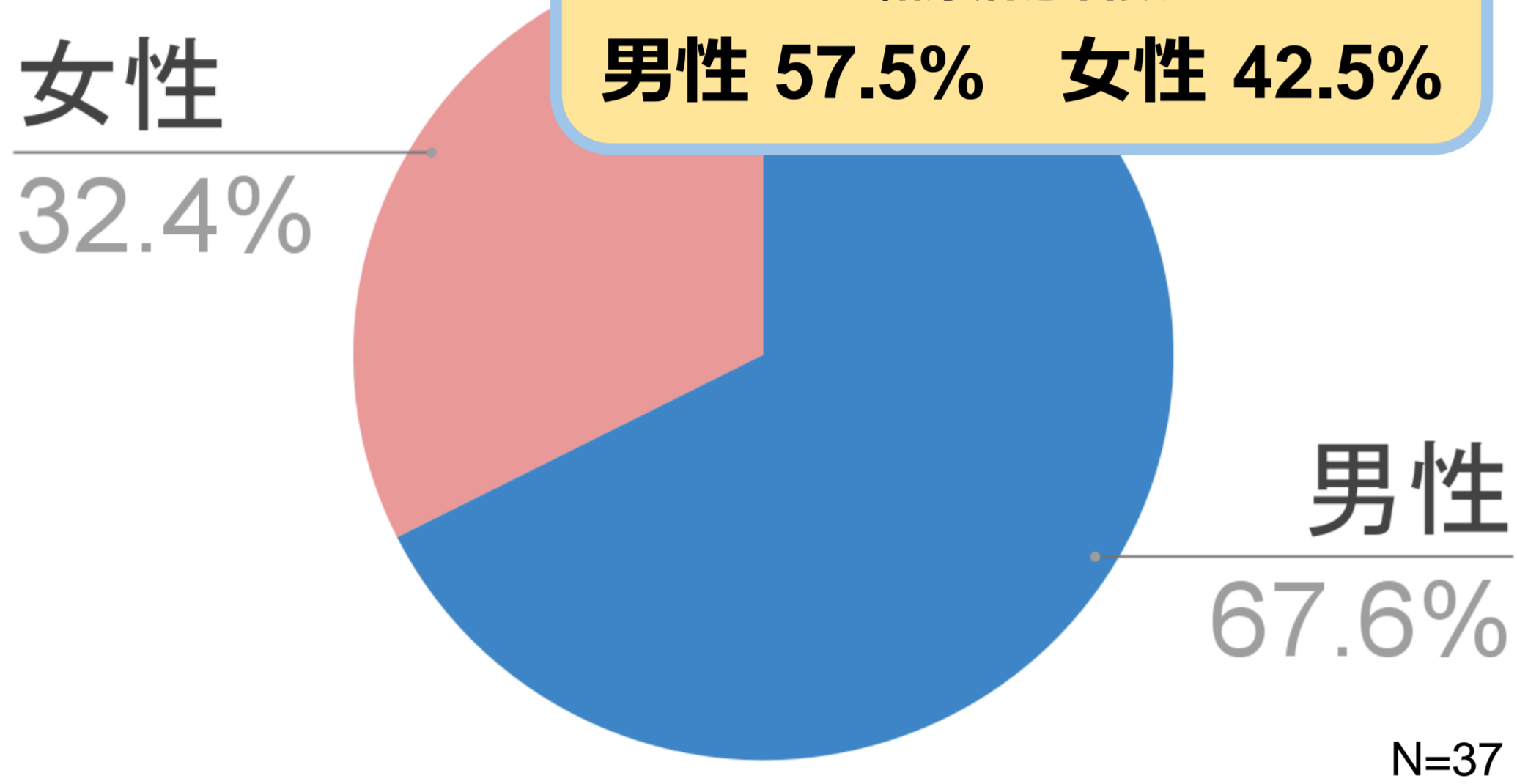
2020年11月に国内初の内服GLP-1作動薬セマグルチド（遺伝子組み換え）錠が発売され、糖尿病治療の選択肢が1つ増える事になった。臨床現場においてセマグルチド錠の服用規格の違いによるHbA1c値の推移や副作用の割合内訳を分析する事で今後の糖尿病薬物治療に役立てる。

方法

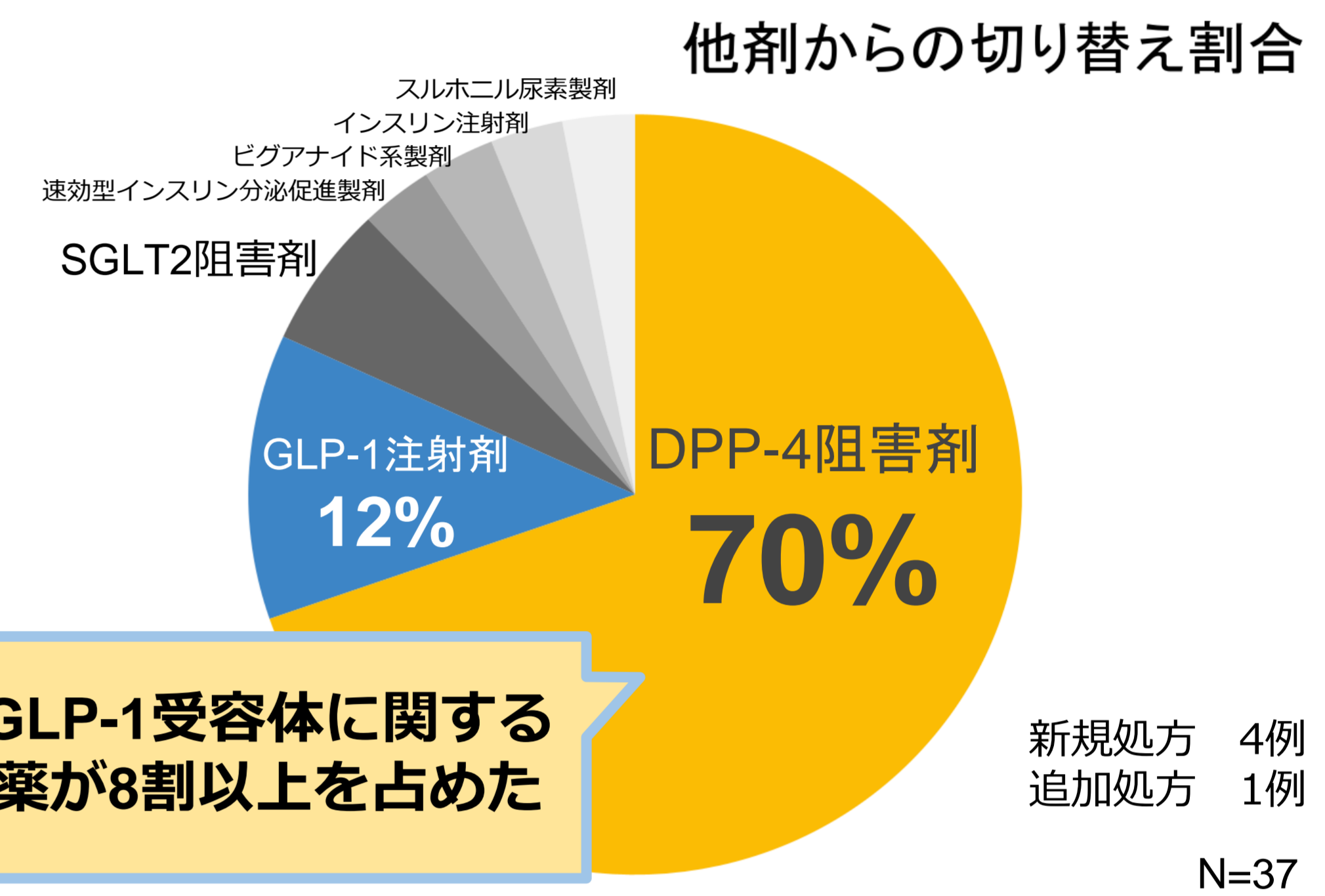
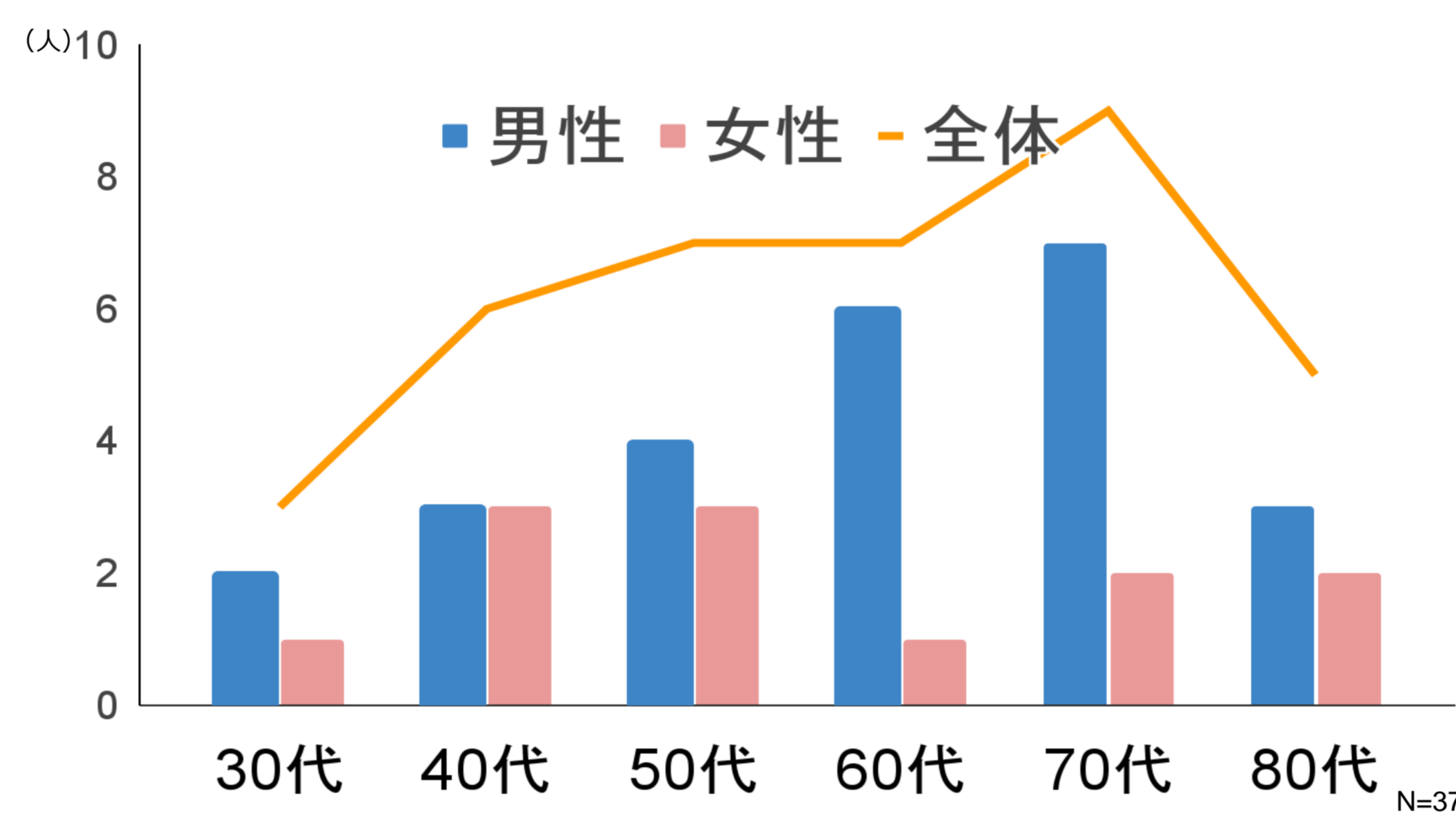
サン薬局全68店舗で2021年12月～2022年4月の期間に新規処方された患者のうち、2回以上来局しHbA1cの推移が分かる症例を対象に、男女比や年代、規格、併用薬、副作用について薬歴より抽出し分析を行った。

結果

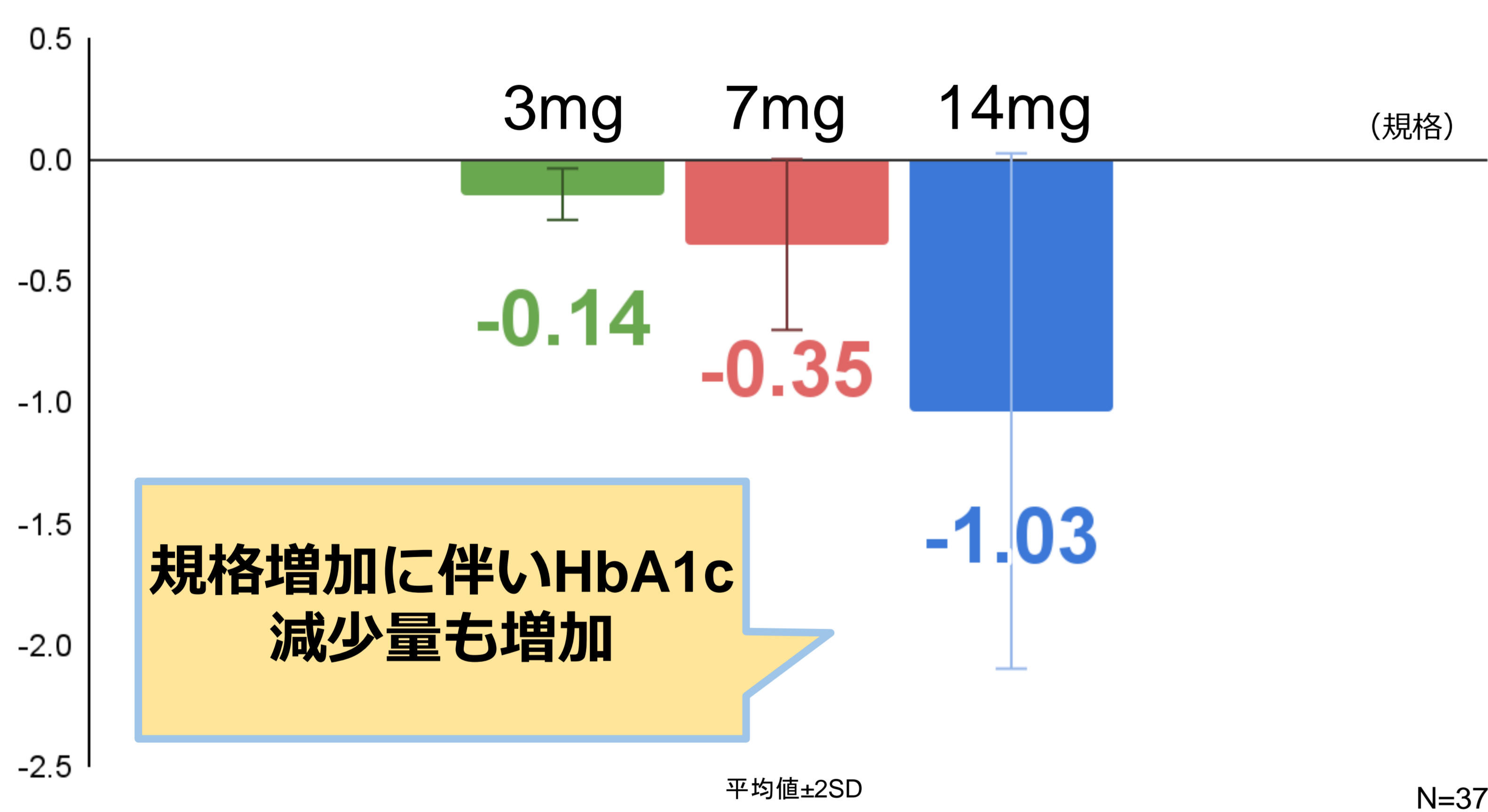
男女比



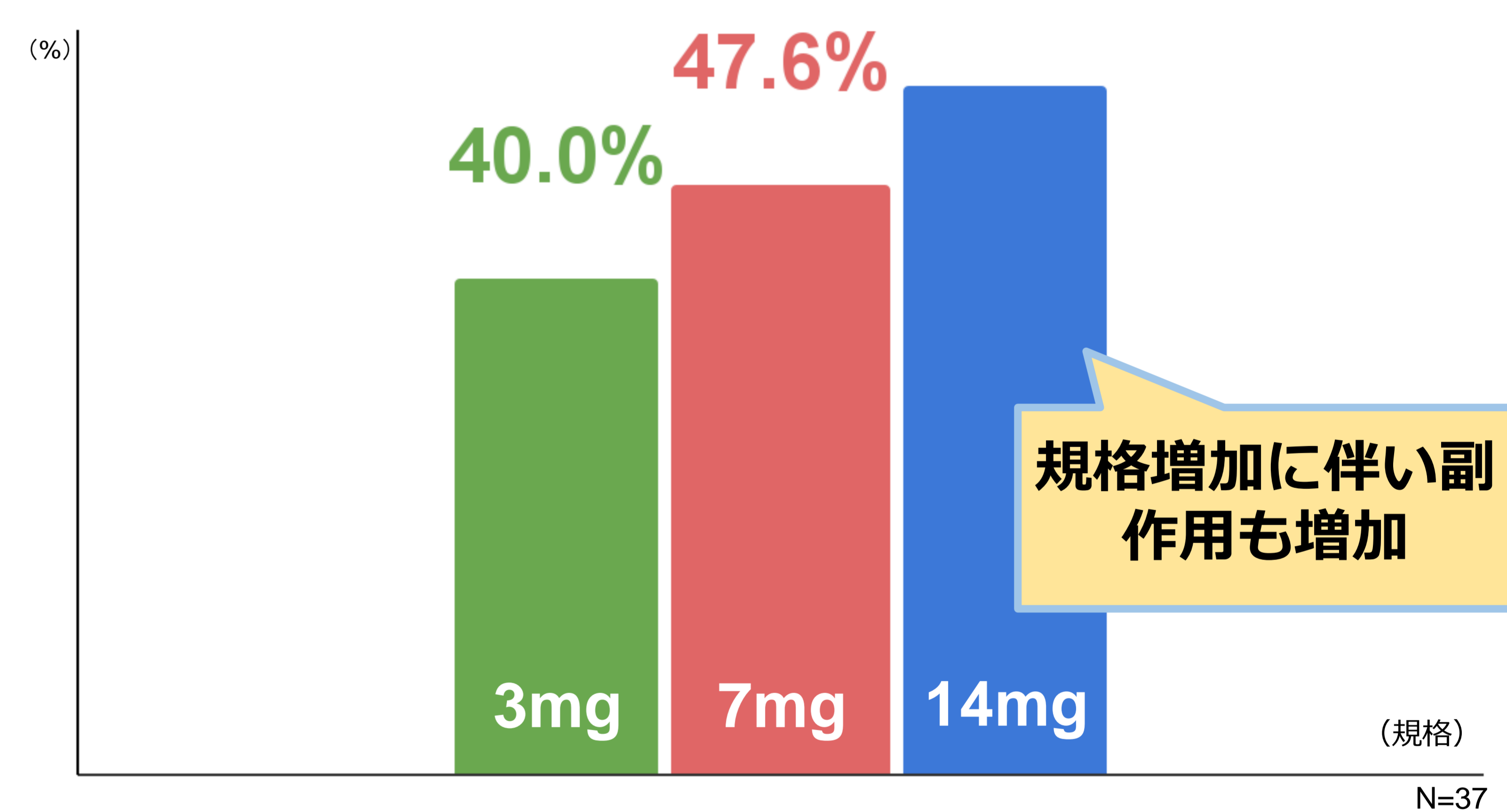
年代別件数



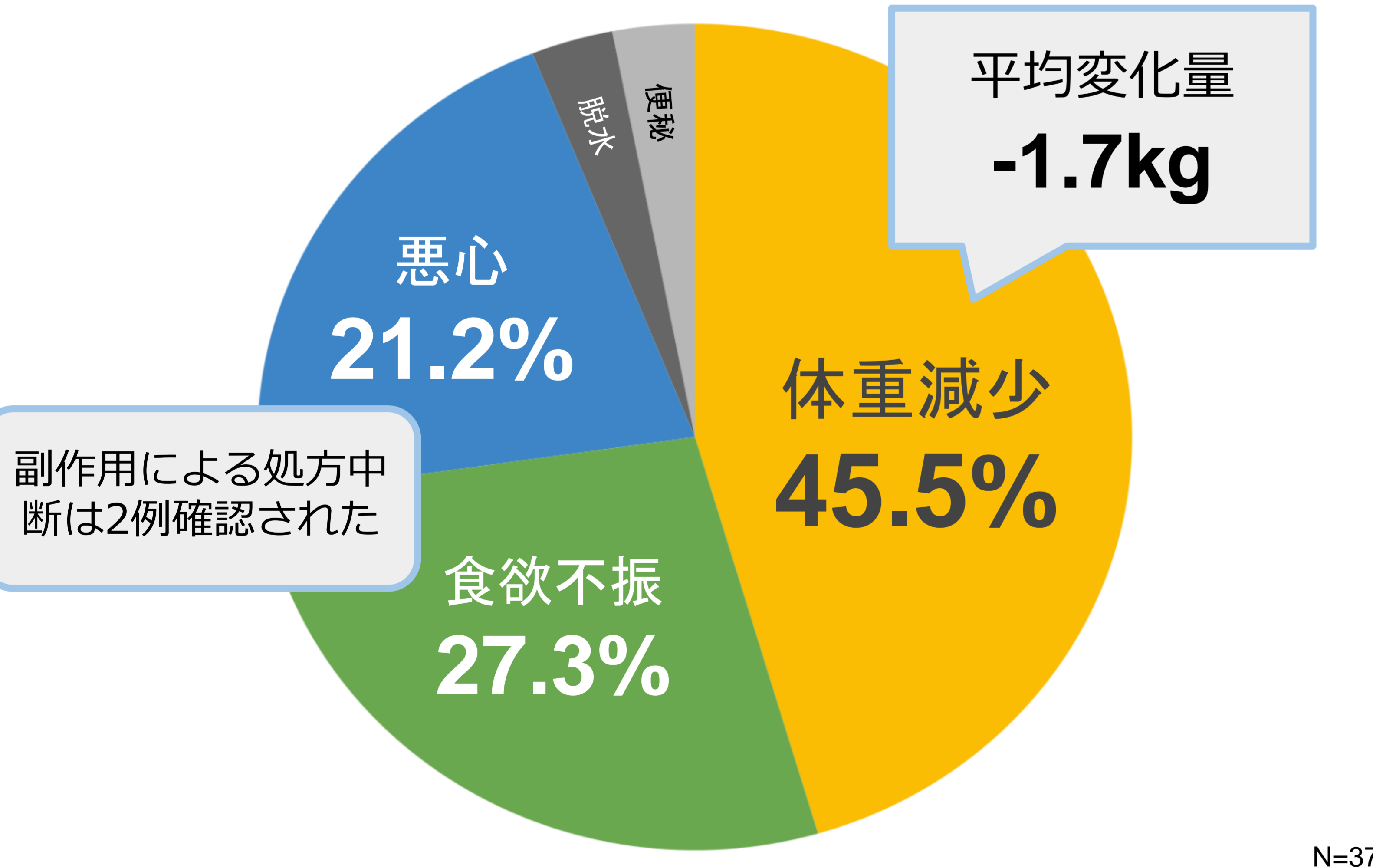
HbA1c平均変化量



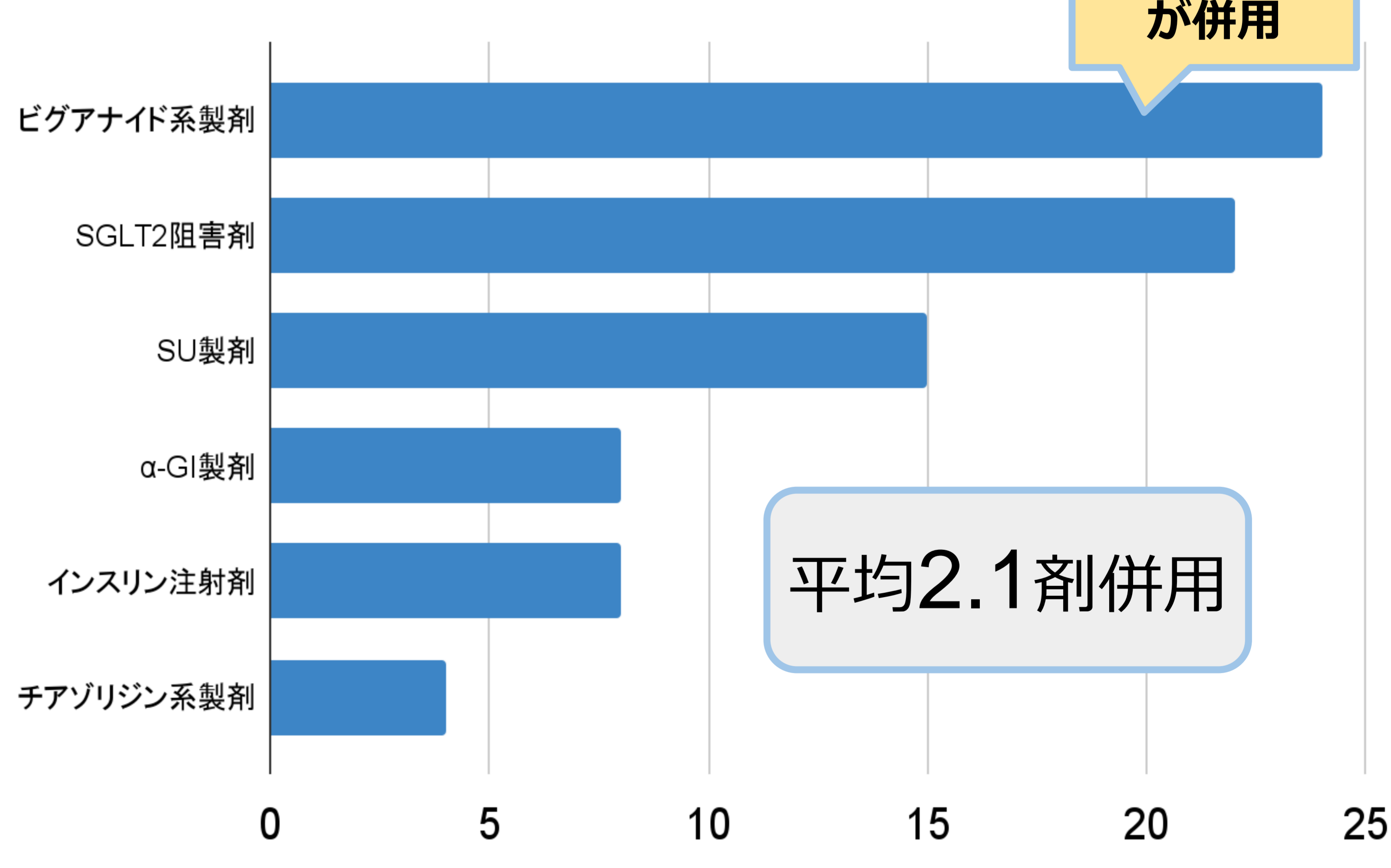
副作用発現率



副作用別割合



併用薬件数



考察

規格が増加するとHbA1cの減少量は大きくなる事が確認できた。規格毎の減少量に有意差はなかったが、併用薬の影響などが原因として考えられる。また、規格の増加に伴い副作用の発現頻度も増加することが確認された。起こりやすい副作用の中には食欲低下、悪心等患者のアドヒアランスを低下させる要因もあるので、継続的確認が必要である。また併用薬の結果よりビグアナイド系、SGLT2系はそのまま併用継続される事が多かった。処方ではDPP-4阻害薬からの切り替えが一番多く、両薬剤ともGLP-1受容体を介した作用機序のため、切り替え対象として最も多数であったと考えられる。今後の研究次第では2剤併用の可能性も含め注視する必要がある。